

あなたの愛につつまれて

アグレッサー 2

目次

あなたの愛につつまれて	5
ファミリー	239

あなたの愛につつまれて

アグレッサー 2

九月。葉浦マリンホテル。

進行役からの紹介を受けて、お洒落なスーツを着た長身の男性が壇上に進む。乾杯のあとの歓談が静まり、バンケットルームに集うホテルマンたちの視線が、一斉に壇上に向けられた。

「神崎秀人です。先週、帰国いたしました」

マイクを通して響く、ちよっぴりセクシーな声。ブランドスーツのショーモデルのように堂々と歩を進めて登場した秀人に、社員一同の視線が釘付けになった。もちろん、新しいホテルの制服に身を包んだ中島美緒もその一人。いつでもどんな時でも、身にまとう華やいだ空気で周囲を魅了してしまう彼に、ため息すら出してしまう。

イギリスの高級車に乗り、イタリア製のビジネススーツを愛用し、健康志向が旺盛で、子どもの頃からテニスをこよなく愛する彼は、美緒の恋人であり、今や神崎リゾート副社長。

こんな場にいると、彼が先週末は自分のマンションにいて、ベッドの中でいく度も愛を交わし合った相手だとはどうにもびんと来ない。副社長就任の挨拶を語るあの唇が身体中にキスを落とし、髪をかき上げるあの指が執拗に自分を駆り立てた。

その場面を思い出すと頬が熱くなり、心拍数が一気に上昇した。

悩ましげな記憶を頭から追いやろうと、美緒は頭を振り払い、小さく深呼吸してから、彼の挨拶に耳を傾けた。

アメリカでの仕事を終えて先週帰国した彼は、総支配人室と同じフロアに副社長室を用意させ、そこを専用のオフィスにすることとなった。そして当面の間、東京本社ではなく、ここ、千葉の葉浦に常駐して総支配人を支援する。経営悪化により、陰山ホテルグループから神崎スポーツに売却された葉浦マリンホテルが、いよいよ明日、開業を迎えるからだ。

美緒の父、中島剛は建築家だった。大学時代の先輩であり、陰山ホテルグループの現社長である陰山俊文から依頼を受け、このホテルの設計を手掛けていた。けれど、ホテルの完成を待たずして事故死する。美緒が中学三年生の時だ。

剛は真面目な男だったが筋金入りの仕事人間でもあり、家族のことをあまり顧みなかった。

父はわたしを愛していない――

子どもの頃から父とすれ違い続けた美緒は、こんな思いに縛られながら大人になった。だが、いつしか父の代わりに、このホテルの行く末を見届けたいと思うようになっていた。ホテルウーマンになったのは、そんな理由からだ。

その美緒に対して秀人は、彼女が今でも父を愛し、父を必要としていることに気付かせてくれた。だから美緒は陰山ホテルグループには戻らず、神崎のホテルマンとして、このホテルの再生に力を尽くそうと決めた。

それは美緒だけじゃない。一緒に日比谷のホテルから異動してきた先輩ホテルマンの安住や、総支配人の雑賀、そして美緒と同じように神崎のホテルマンとしての道を選んだ、この場にいる同僚たちも同じであるはずだ。

約半年に及んだ改装工事の間、騒音と埃にまみれていたホテルは、光と緑があふれる、明るくてエレガントな空間に生まれ変わった。すでに昨日と今日は、マスコミや旅行会社、上得意企業へ向けての内覧会が行われた。いわゆるビジネスデーというやつだ。

昨夜のテレビニュースでは、新装されたマリンホテルが取り上げられていた。

そして今夜、ホテルで一番広いバンケットルームを使って、社員だけの開業記念パーティが行われている。神崎スポーツの社長であり、秀人の父でもある神崎秀生が東京からかけつけ、今日まで開業に向けて頑張ってきた社員に、労いの言葉をかけた。そしてこれからは神崎のホテルマンとして、惜しみなくその力を発揮してほしいと力強いメッセージを送る。

続いて神崎リゾートの社長からも同様の挨拶があり、その後にはリゾートの副社長に就任した秀人が紹介された。

副社長としての抱負を堂々と語る彼を見ると、彼を誇らしく思うと同時に、何だか手の届かない存在になってしまったような気もして、複雑な思いに駆られたのも事実。

自分らしくもないなど、美緒は気持ちを奮い立たすべく、手にしたシャンペンのグラスを飲みほした。オープンが明日だ。この場にいる誰もが、わくわくしながら新たなスタートを待ち望んでいる。弱気になんか、なっちゃだめ。

会場には、神崎フィットネスクラブのインストラクターである、福原も来ていた。ホテルのオープンを機に、福原は駅前のクラブから、マリンホテル内のフィットネスクラブに移る。

——これからは同僚ですね。

さつき顔を合わせた時に、彼はそんなふうにした。同時に、

——中島さんのお父さんが、このホテルの設計を手掛けたんだそうですね。

とも言った。たぶん、他のスタッフにでも聞いたのだろう。死んだ剛がこのホテルの設計に携わっていたことは、いつしかスタッフの間に広く知られるようになっていた。

素敵なホテルに生まれ変わったわ、お父さん。彼と、彼のお父さんのお陰よ。

視線はおのずと、壇上で挨拶する秀人とその父に向けられた。

大丈夫。きつと最高のスタートが切れる……！ そう胸に言い聞かせ、美緒は福原と話をしようと思ひ合うホールを移動し始めた。すぐに一人の女性が、美緒の行く手をさえぎる。

「中島さん」

現れたのは広報課の楠田さゆり。マリンホテルが神崎スポーツに売却されたあと、神崎リゾート本社から移って来た女性だ。秀人が言うところの「神崎の精鋭」の一人らしい。

今年の夏、ホテルでは事前PRの一つとして、ホテルのスタッフが出演したテレビコマーシャルを制作し、八月からテレビやネットでオンエアした。

美緒は指名を受け、安住と共にコマーシャルに出演したが、こういった宣伝活動はさゆりが中心

になつて進められてきた。

「今日まで色々とありがたい。聞いていると思うけどCMは大好評で、おかげでホテルのPRはばつちりよ。それにね、CMに出てきたホテルウーマンは誰だつてという問い合わせが多くて、広報は嬉しい悲鳴をあげてるわ。彼女をはじめ、ホテルのスタッフはすべてうちの社員ですつていうと、みんな驚くの」

マニッシュな印象のショートヘアに柔らかい笑みを浮かべ、さゆりは気さくに話しかけてきた。間もなく二十九歳の誕生日を迎える美緒より少し年上だと聞いていたが、美緒より二十センチくらい背が低い。笑うといつそう、親しみやすさを感じる。

「今後も色々な企画を考えているわ。そこでお願いがあるんだけど」

「お願い？ ……どんな？」

「まだ、具体的には決まっていらないんだけど」

声をひそめてそう前置きしてから、さゆりは笑顔で続けた。

「できたら今後も、マリンホテルの宣伝に力を貸してほしいの」

「はあ……」

意外ではあるが、といつて想像できないような申し出でもなかった。

ただ明日からの開業にあたり、美緒は今までのフロント業務から、クラブフロアのコンシェルジュ業務に担当が変わっている。

クラブフロアというのは、ホテルの上層階に用意された特別なフロアで、室料は高いがその分、

内装やアメニティがレギュラーフロアよりグレードアップされている。専用エレベーターや専用ラウンジなども用意され、滞在中はワンランク上の上質なサービスを受けられるのだ。

そこで美緒は専任コンシェルジュとして、クラブフロアの宿泊者のためにチェックイン・アウトの手続きをしたり、レギュラーフロアでは提供しないような、細やかなお世話をするのだ。制服もブルーが基調のフロントスタッフとは異なり、黒のスーツだ。首にはスカーフを巻く。

おそらくは神崎スポーツの取引先や、神崎スポーツクラブのゴールド会員などの利用が予想される。時には超VIPの来館もあるだろう。日勤だけになったとはいえ、慣れるまでは神経を使いうだ。できれば当面の間は、自分の業務に専念したいのが本音だが。

「そんな深刻な顔をしないで」

考え込んでしまった美緒を、励ますようにさゆりは言った。

「力を貸してと言っても、本来の業務に差し支えない範囲でだから。今や、あなたやベルの安住君はこのホテルの顔でしょ？ 最前線で働くホテルマンとして、もう少し前面に出てもらえたらって考えてるの」

「もしかしたら、またテレビ用のCMを作るんですか？」

瞬時に、黒いサングラスをかけた男の顔が思い浮かんだ。

好評を博したというCMだが、同時にとんでもない事件をも引き起こしていた。

九月に入つて間もなく美緒は、CMを見たという黒いサングラスの男に声をかけられ、しつこく付きまとわれるようになる。ただのナンパだと思つて無視し続けたが、男は生前の美緒の父から預

かつた物を返したいと言ひ出し、うっかり信じた美緒は夜の海岸で男に襲われた。

——たぶん君に渡すはずだった、クリスマスプレゼントじゃないか……

男はそんな言葉を並べ立てたが、もちろんすべて嘘。父からのクリスマスプレゼントなどありはしなかった。男はマリンホテルへ嫌がらせをしようとしたくらむ同業者に、差し向けられたのだ。

あの場は秀人が駆け付けてくれて、間一髪、難を逃れた。男を雇ったと思われる黒幕にも、秀人が毅然と立ち向かってくれた。

もう心配はないと彼が言ってくれたから、襲われたことは誰にも口外しなかった。けれどあれから十日も経っていない。男の声も怖い記憶もまだ頭に残っている。

卑劣な脅しには屈しないと心に誓った美緒ではあるが、自分が狙われたきっかけがCMだとすれば、もうしばらくは露出を控えていたいと思う。

「ねえ、ほんとにそんな顔しないで」

今度はさゆりのほうが、困った顔をする。

「中島さんを困らせるつもりじゃないのよ。それにテレビCMは当分作らないから。お願いするとしたら、もっと簡単なことよ。だから気楽に考えて。ねっ！」

「いいんじゃないか？ 引き受けてやれよ」

突然秀人の声がして、壇上にいたはずの彼が近づいてきた。彼は美緒の横に並んで立つと、手にしたシャンペングラスをさりげなく掲げて、二人の女に向かい乾杯の仕草をした。

「神崎君……、じゃなかった。副社長」

さゆりが目を輝かせる。秀人は肩をすくめてみせると、こんなふうに説明した。

「楠田さんは俺と同様、神崎スポーツの入社なんだ。ここに来る前は銀座のオフィスでも一緒だったし、二年先輩でもあるし、頭が上がらなくて」

ふざけてそんなふうに紹介した秀人に、さゆりは大げさに怖い顔をしてみせた。けれど美緒の隣に立った秀人を見て、興味深そうな顔をする。

「もしかして、お二人も前からの知り合いなの？」

「いえ」

「彼女が日比谷のホテルにいた時からの付き合いです」

美緒の言葉は無視して、そうだよな……と、秀人が同意を求めてきた。そしてほんのわずかだけこちらに寄り添ったので、美緒は慌てて彼の言葉に補足した。

「わたしがシンフォニア日比谷にいた頃、副社長はたびたび取引先の方をお連れになったんです。ほら、あそこは銀座のオフィスから近かったでしょう？ それでお顔を知っているというわけ……」

当たり前障りなく笑いながら、美緒はそうつと秀人との距離をあけた。

こんな場で何を言い出すやら。

壇上には、彼の父や他の重役たちだっている。それぞれどこか、いつの間にか周囲のざわめきが消えて、同僚達が自分たちのやり取りをうかがっているようだった。気づいていないはずがないのに、なぜわざわざ秀人は、周囲に誤解されるようなことを言うのだろう。

さゆりは秀人の言葉をどう受け止めたかわからないが、へええと、相槌をうった。

「じゃあ、いざとなったら副社長が味方してくれるのかな？ 中島さん。その時はよろしくね」

「え、ええ……。まあ、どんな企画なのか、決まったら教えてください」

OKという返事を残して離れていくさゆりを、美緒は秀人と共にその場で見送った。

「あの通り小柄な人だけど、元バレーボール部で、インターハイ出場経験者だ。いつもはつらつとして、あんなふうにはパワー全開で。後輩の面倒見もいから、何かあったら頼るといい」

そんなの……と、言いかけて、美緒は危うく口調を改めた。

「ありがとうございます。何かあれば遠慮なくそうさせていただけますので」

秀人は鼻先でせせら笑っただけで、美緒から視線をそらさないまま、シャンパンをすすった。グラスの中ではじける小さな気泡が、シャンデリアの下できらきらと輝いた。

彼はみんなが見ている前で自分に熱い視線を送り、どう反応するか楽しんでる。みんなが聞き耳を立てているのを承知の上で親しげに振る舞い、昔からの付き合いだと平気で言いきる。

隠しごとが嫌いな彼らしい。常に堂々と。それが彼のポリシー。

だけど今は仕事中。視線を絡ませ合い、どきどきときめいている場合ではないし、彼に見つめられて良からぬ妄想を抱いている場合でもない。

落ち着いて、美緒。

そう自分に言い聞かせるうち、以前もこんなパーティがあったことを思い出した。何も知らずに招かれた陰山家のパーティで、美緒は秀人に出会った。うっとりするようなハンサムで、気取った

仕草で美緒にお辞儀した。

自分の容姿に自信を持った、お金持ちのボンボンじゃない。絶対に好きになんてならないから。

初対面ではそう思ったのに、彼に恋している自分に気づくまで、時間はかからなかった。彼がアメリカに行ってしまった後も、一年以上彼のことを想い続けた。

待ち続けた日々は終わり、彼は美緒のもとに帰ってきてくれた。心を痛めることがなかったわけではないが、以前の二人の関係を取り戻した美緒は、幸せを感じている。

とはいえ。

マリンホテルは新しいスタートを迎えている。

今の美緒は神崎のホテルウーマンとなった。副社長となった秀人は上司にあたる。

もし秀人が二人の関係を公認のものにしようなどとたくらんでいるなら、絶対に阻止しなくては。職場にプライベートを持ち込むわけにはいかないし、もしも二人の関係が周囲にばれたら、かつて安住がそうしたように、皮肉や中傷をされないと限らない。

「この件については、後ほどお電話で」

あとでどことん、話し合いますよね。

目だけでそう訴える。秘密にするからこそ燃える……。そんな恋もあるのだと、彼に教えてあげなくては。けれど了解のつもりなのか、秀人は悩ましげに微笑み、こっそりとウィンクした。

翌日は朝から快晴の、素晴らしい一日だった。

陽射しは夏のなごりをとどめているが、空気はすでに秋の爽やかさを含んでいた。神崎リゾート・葉浦マリンホテルは新しいスタートの日を迎えた。

マスコミ関係者や地元のケーブルテレビ局のカメラ、そして一般客を前にして、午前十時にテープカットが行われた。神崎リゾートの幹部はもちろんのこと、親会社である神崎スポーツからも社長を筆頭に数人の幹部がやって来て、ホテルの総支配人や各セクションのスタッフ総出でのオープンングセレモニーが行われた。

ホテルの前には時間前から一般客が長い列を作っており、オープンと同時に大挙して館内に押し寄せた。開業記念メニューを用意したレストランには長蛇の列が出来、館内で行われる様々なオープンングイベントを目当てに訪れた人々が、あちこちで人だかりを作っていた。

母の幸枝は、美緒の幼馴染みの千秋と、千秋の恋人である脇田蓮の三人で、連れ立って来てくれた。モデル時代のマネージャーである東条りん子は開店前の人々の列にいたのか、真っ先にロビーに立つ美緒に気づいて駆け寄ってきた。そしていきなり美緒に抱きつき、周囲を驚かせた。

「おめでとう、美緒」

親しい人たちからかけられる言葉に笑顔で頷きながら、ふと美緒は吹き抜けの天井を見上げた。降り注ぐ柔らかな陽射しの中に、父の笑顔が見えたような気がした。

翌金曜日も、朝からホテルは大勢のゲストでにぎわいを見せた。その勢いは週末まで続く。盛りだくさんのイベントや工夫を凝らした宿泊プランが好調で、客室は予約で埋まり、レストランもバンケットルームもフル回転している。

クラブフロアの担当である美緒だったが、結局は館内の方々を飛び回っていたような気がする。こんなに忙しいのは久しぶりだ。日比谷にいた頃、大物芸能人の結婚披露宴があったりするとこんなふうにてんてこ舞いをしていた。あれ以来だろうか。

けれどどんなに忙しくて、休む暇がなくても構わない。嬉しい悲鳴とはこういう状況を言うんだろう。大勢のゲストでホテルが賑わうことは、嬉しい限りだ。

「美緒」

「綾乃！」

オープンから四日目の日曜日の午後だった。突然、シンフォニア時代の友人、和久井綾乃が現れた。

「おめでとう美緒。忙しそうね。それに凄い人ね。VIPでも来てるの？」

「ううん。オープンングイベントが目当てで来た人ばかりよ。色々と楽しい催しがあるから……」
そう言って美緒は、ロビーの中ほどにある大階段にできた人の列を指差した。間もなく二階のバンケットルームでジャズシンガーのミニライブが始まる。その開場を待つ人の列だ。

「今日はどうして？」

和久井綾乃は同期入社で同い年だったが、美緒は日比谷、綾乃は新宿のホテルの勤務。それほど親しく付き合っていたわけではなかった。

「いやだな。心配だから見に来たんじゃない。私たちの同期って、もう何人も残ってないでしょ？みんな美緒がどうしてるか気にしてるんだよ」

「そうなんだ……。ありがとう、綾乃」

シンプルなベージュのブラウススーツを着た綾乃を、しみじみと眺める。彼女の仕事は重役秘書。身なりは常にビジネス仕様で、知的なファッションが好みのようなのだ。

「ねえ、今日は何時に終わるの？ 少しでもいいから話さない？ お茶だけでもいいんだけど」

「ごめん。あと少しで上がりなんだけど、少し残業して、そのあとは業務報告を書いたり反省会をやったりと色々あるのよ……」

「そっか。わかった。じゃあ、写真だけならいい？」

美緒の返事を待たずに綾乃は携帯電話を取り出すと、素早く美緒の肩を抱いた。小柄な綾乃に合わせて、思わず膝を曲げる。そのまま綾乃は携帯のカメラで、ぱちりぱちりと写真を撮った。

「東京に帰ったら、同期のみんなに見せるわ。頑張ってるね、美緒。たまには電話してよ」

携帯をバッグにしまうと、名残惜しそうに手を振りながら、綾乃はロビーの人ごみの中に消えた。心配してわざわざ会いに来てくれたようだ。

そんな綾乃の気遣いが嬉しくて、美緒は自分自身に気合を入れ直し、持ち場に戻った。

けれど美緒は、綾乃の本当の目的には気づけなかった。

数日後の金曜日の夜、陰山ホテルグループ副社長であり、千秋の兄である陰山彰文は、シンフォニア日比谷での会議を終えたあと、歩いてすぐのライバルホテルのバーに向かった。敵状視察と思われるかもしれないが、そうせざるを得ない別の理由があった。

神崎の傘下に入ったマリンホテルが好調だということは、彼の耳にも入っていた。もつともオープン直後で多彩なイベントが目白押しのはずだから、この時期好調なのは当然と言えば当然だ。

開業一ヶ月を過ぎて、客足が落ち着いてからが勝負だろう。所詮、マリンホテルは郊外型のリゾートだ。東京を離れたあの立地で、高い客室稼働率を保てるはずがない。せいぜい宴会の受注を維持するくらいだろう。

わかっているのだが、彰文にはこの結果は面白くなかった。

背後から、神崎秀人の高笑いが聞こえてくるようだ。美緒がああ男のものになったと思うたび、悔しさに胸が痛む。どんなに好きでも、決して美緒には手が届かなかった。子どもの頃から、絶えず母の律子が邪魔をする。

母には頭が上がりなかった。

女のことで問題を起こすたび、尻拭いしてくれたのは母だった。金を渡し、二度と会わないし口外もしないと念書を書かせ、女たちに手を切らせる。やがて早く身を固めると母が言い出し、仕方なく彼は、好きでもない多香子と結婚した。

だが多香子との生活は息が詰まりそうだった。もつと控えめな女だと思っていたのに、多香子は

病的なほど彰文の行動を把握したかった。

その息苦しさから逃れるために彰文は、たびたび家を空け、愛人と遊び歩くようになった。秘密は守られていると思っていたのに、気づくと母の耳に入り、手を打たれる。学生時代から六本木界限で遊んでいるが、どうやらあの界限には母のスパイがいるらしい。

ライバルホテルのバーに来たのは、行動範囲を変え、母の目をかいくぐるためだ。もつとも母は、半ばあきらめ顔でうまく立ち回れと言った。ということは、ばれないように遊べということだろう。このあたりのホテルのバーなら、大人の遊び方を心得た女に出会えそうな気がした。

静かなバーで一人カウンター席に座り、どんどん酒をあおる。何杯目かのグラスを飲み干そうとしたとき、誰かの手が自分の手を押さえた。

「飲みすぎですよ……。副社長」

秘書の和久井綾乃だった。何故ここがわかったのか。まさかつけて来たのだろうか。彰文は綾乃を、不審げに見上げた。仕事の後だというのに彼女は、地味な紺のスーツに、髪は後ろでまとめたまま。そばにいられると、オフィスに戻った気分させられる。

「もう遅いです。それくらいになさったほうが」

「放つといってくれ」

言ってしまったから、こんな場所で声を荒らげたことを彰文は恥じた。

綾乃はどこことなく妻の多香子に顔立ちが似ていて、それが彼をいらいらさせた。家を出てまでも多香子の顔など見たくなかったのだ。

だが次の綾乃の言葉に、彰文ははつと顔を上げた。

「美緒は葉浦で元気にしていましたよ」

「行ったのか、葉浦に」

「はい。私、美緒とは同期入社なんです。先週の日曜日に様子を見してきました。向こうはすごい人出でした」

「美緒は、いや、中島君は……」

「彼女、副社長の妹さんのお友達だったんですね。今は、クラブフロアの担当になったそうです」

綾乃は彰文の隣の椅子に腰を下ろし、近づいてきたウェイターにカクテルを注文した。

「少しお付き合いします。あ、美緒の写真もありますよ。ご覧になりますか？」

一時間と経たないうちに、彰文は酔いつぶれた。会計を済ませると、綾乃は足元のおぼつかない彰文を支えて、ホテルの玄関前からタクシーに乗り込んだ。車で三十分ほどの距離にある、自分のマンションの住所を告げる。

綾乃は入社したところから、陰山彰文に憧れていた。残念ながら振り向いてはもらえず、彼は他の女性と結婚したが、幸運にも去年の春から彼の秘書となった。そして彼の秘密を知った。

副社長は奥さんを愛していない。それどころか中島美緒に報われない想いを抱き続けている。

去年の春にマリンホテルでプレゼンがあった日、綾乃も彰文に同行して葉浦に行った。夕方東京へ向かう車の中で、隣に座った彰文はかかつてきた電話に出るなり顔色を変えた。そして美緒と叫

んだのを綾乃は聞いた。

それ以降、私生活も含めて彼の動向を詳しく観察続けた。次々にモデルの女と付き合い、母親の怒りを買っていることも全て知っている。

「私のマンションです、副社長。少し酔いを醒ましてから帰られたほうがいいですよ……」

タクシーを降りると、半分意識のない彰文を引きずるようにエレベーターに乗せた。部屋に招きいれ、ひとまずリビングのソファに座らせようとした。そこでくると体勢が入れ替わり、綾乃はソファに押し倒された。

「わざとか。わざと酔わせたのか？ 僕を」

「副社長……」

欲望にぎらつく彰文の目に、綾乃は身動きできなくなる。彼の手が胸をさまよい、びりつと音をたててブラウスが引き裂かれた。

さらけ出された胸元に、乱暴に唇が落ちてきた。綾乃は天井を見つめたまま、されるままになっていた。やがて彼の背に両手を回し、髪に指を滑らせる。

私は彼が好き。彼に奥さんがいても構わない。

3

怒涛のオープンングウィークが過ぎ、ホテルは飲料部も宿泊部も、順調に売り上げ目標をクリアしていった。相変わらずバックヤードでは、嬉しい悲鳴がこだましている。

秀人は最初の週末までホテルに泊まり込んだが、週明けには東京に戻り、それ以降は毎朝秘書を同伴し、運転手つきの車で出勤してくるようになった。

いよいよ副社長らしくなったと思う。けれどホテルにいても、オフィスにこもりきりになることはなく、毎朝の重役会議には必ず顔を出し、時間を見つけてはロビーに降りて、雑賀と連携しながら館内の動きに目を配るようになっていた。

彼がようやく美緒のマンションを訪れたのは、オープンから二度目の週末。夕方仕事を終えてマンションに戻ってみると、鼻歌を歌いながら秀人が夕食の支度をしてくれていた。

「ウインクなんて絶対にしないで」

キッチンに駆け込んだ美緒は、ただいま代わりのキスの後で、昨日ホテルで彼がこっそりウインクしたことを注意する。クラブフロアに勤務する美緒は、ゲストからのリクエストが多すぎて、この数日はほとんどクラブフロア内にこもりきりとなっていた。

そういう時でも秀人は、しっかりと様子を見に来た。そして神崎スポーツの取引先である関西の

実業家を見つけて声をかけ、その隙を見計らって、美緒にウインクすることも忘れなかった。

パーティの時をいれると、これが二度目、いや何回目になることだろう。

「さて。何の話かな。目にゴミが入って。パチパチしたのは覚えてるが」

「気持ち嬉しいの。あなたにはたくさん感謝してる。でも、ほどほどが大事よ。あなたがにやけてたら、みんなの士気が下がるで……」

それ以上言えないように、秀人は美緒の唇の前に人差指を立てた。

「今さら隠すことか？ 君が日比谷のホテルにいた頃、俺がせつせと通っていたのは、君の同僚なら知ってる。噂が噂を呼び、葉浦のスタッフにも広まったことも知ってるぞ」

そうだった。

仕事のあとに彼がホテルまで迎えに来て、彼の車に乗り込んだ場面を見られたことがある。その翌日にはホテル中のスタッフに知られることとなり、葉浦に転勤したあとも、安住の口から周囲に漏れ伝わった。

ただあの時の美緒はシンフォニアの人間で、今とは事情が違う。

秀人はそんなことなどどこ吹く風で、あっけらかんと言った。

「すべてお見通しなのに、素知らぬ振りをするのがクールな大人の対応だよな」

「ええ、そうね。けど、現実はあるが思ってる以上に厳しくて、複雑なの」

「どう複雑なんですかね。詳しく教えてほしいな」

「聞かないほうがいいこともあるわよ」

グリーンのエプロンをかけていた秀人は、鍋のスープをかき混ぜる手をとめ腰にあてた。

「これでも一応、気を使ってだな。駅前のスーパーで買い物なんかしてこなかったぞ。週末になると副社長が葉浦海岸駅の周辺をうろついている……なんて噂が広まっても困るしな。食材のほとんどは小石川の家から調達して来た。運よく料理の上手な家政婦が、ワインによく合うきのこのカルパッチョとキャビアのオードブルを作ってくれたんでね」

わお！ なんて美味しそう！

「ありがとう。でもね……」

「まだ言うか。それともこそそしろって、俺に指図する気か？」

「こそそじゃなくて、品位を保ちましょうというか。ええと、そうね……」

「品位ね」

秀人は言うのと、コンロの火を消し、あつという間に美緒を腕の中に閉じ込めた。

「誰が相手かにもよるな。目の前の女性に対しては品位なんて保てそうにない」

そうして美緒が反論する前に唇をふさいだ。

「久しぶりに一緒に過ごせるってのに、いきなりケンカする気か？」

「ごめんなさい。順番を間違えました」

「よるしい。じゃあ食事にする？ シャワーにする？ それとも」

耳のそばでささやかかれて、うなじがくすぐったくなる。答えられずにいると、再び唇を奪われた。今度はうんと濃厚なキス。前菜を飛び越して、いきなりメインのステーキが運ばれてきたみたいだ。

互いに呻き合いながら絡みつくようなキスを繰り返し、美緒は壁の前に追い詰められる。バッグが床に落ちて、肘が冷蔵庫の角にぶつかった。

スカートをたくしあげた彼が、ヒップを撫でまわし、強くたぐり寄せた。エプロン越しに伝わってくる彼自身の熱い昂ぶりに、美緒の身体からだの中心も熱く疼きはじめ。ブラウスのボタンをはずされ、キャミソールのストラップが肩から下ろされても抵抗しない。むしろ自ら進んで肩を揺らし、彼が脱がせる手助けをしていた。

秀人の唇が落ちてきて、次々と素肌に熱い刻印を押しこめていった。美緒は彼の髪に指を滑らせ、彼がつけている男つばいスリリングな香りを胸いっぱい吸い込む。

彼が好き。彼はわたしの恋人。触れられただけで、身体に火がついてしまう。

「ここで……なの？」

「思いたったら即実行が、君の生き方だろうか？」

「だからって、あ……」

邪魔な衣類をかき分けて、彼の指がまっすぐに美緒の中心部に進入して来た。身体からだの奥がいつそう熱く疼き出し、立っていらなくなる。彼の首にしっかりとしがみつき、美緒はめくるめくる官能に翻弄ほんろうされ続けた。うっすらと目を開けると、暗く翳った彼の目にとらえられる。お前まへが欲しいと、俺おれの前にすべて差し出せと、そんな彼の心の叫びが伝わってくる。

けれど初めて身体を重ねた頃の、傲慢で伶俐な光は消えていた。たった一度だけ、暴力的に抱かれたこともあった。その時のような身勝手さももはやない。

愛していると彼は言ってくれた。美緒を激しく求めながらも、彼の息づかいや指使いの端々に、思いやりが感じられる。美緒は安心して、彼にすべてをゆだねる。彼もまた、一度の頂点に満足せず、いく度も美緒を求め、新たな悦びを見出そうとする。

「これで終わるなんて思うなよ」

彼は息をはずませる美緒を抱えあげると、ベッドルームに運んでくれた。シーツに横たえられた美緒は、息が整わないまま、彼が裸になるのをぼんやりと見つめる。

もとより、堂々とふるまうのが彼の主義なのだ。だから二人の関係を隠すことに抵抗があるというのだろう。それに秀人が二人の関係を公表したがるのには、理由があった。

「君には神崎がついていると、知らしめてやる必要がある」

のらりくらりと言い訳したあと、決まって彼はこう言った。

黒いサングラスの男に襲われてから、まだ一ヶ月と経っていない。あの事件をきっかけに、秀人はいつそう美緒の私生活に踏み込んでくるようになった。相変わらず毎晩電話をくれて、変わったことはないかと聞いてくれる。ホテルで顔を合わせれば、仕事の振りをして話しかけてくる。

単に、いちゃいちゃしたいからではない。美緒を心配してくれていることなのだ。それがわかっていながらこそ、彼を強く突っぱねられないのであるが。

自分を襲った男は誰だったのか。いや、誰に指図されていたのか。

そんなことを考えないわけではなかった。ただ、二度と美緒に手を出せないよう手を打つたと、秀人が言ってくれた。彼が守ってくれる。だから今は彼の言葉を信じていよう。

「何を考えてる？ まさか、俺以外の男のことを考えていたりしないよな」

避妊の装備をしてから、彼は美緒に覆いかぶさってきた。身ぐるみ剥がされた美緒は、うまく身体をずらして、二人が繋がりやすい体勢をとる。

「そんなことないわ。今はあなたしか」

「よせ、その先を言うな。これ以上骨抜きにされたら、来週からの仕事に差し障る」
音を立てて派手にキスをして、彼は一気に美緒の中に入って来た。

蜜月のように甘くて満たされた週末を過ごし、数日が過ぎた。

十月に入つてすぐのある日、ホテルの社員食堂で美緒が少し遅い昼食をとっていると、楠田さゆりがやって来た。秀人と、広報課の男性上司を引き連れて。

「休憩中にごめんね、中島さん。この前言った、お願いの件なんだけど」

立つたまま、さゆりはいきなり用件を切り出した。慌てて美緒は食べかけの食器を脇にどけて、座るように三人を促した。ありがたいの声のあと、テーブルを挟んで正面にさゆりが座り、その隣りに彼女の上司と秀人が腰を下ろした。

「来月、総合ブライダルフェアがあるんだけど、その時にチャペルで模擬挙式をやるの」
「模擬挙式？」

「そう。お客様の前で結婚式を上演して、一連の流れや演出を見てもらおう、あれね」

二人の男を座らせたまま、さゆりは簡単に模擬挙式の説明をした。

「今までブライダル課では、月に数回のウェディング相談会しかやってこなかった。でも神崎のホテルとして再スタートを切った今、内容をもっと充実させて、春と秋にはうんと盛大なウェディングフェアをやるうってことになったの。その目玉の一つが模擬挙式というわけね。ブライダルの収益は、どこのホテルでも馬鹿にならないわ。立て直しが必要なのよ」
「ええ、わかります」

模擬挙式や模擬披露宴を組み込んだブライダルフェアは、この近隣のホテルでも盛んに行われている。今までは赤字続きで派手なイベントは企画できなかつたが、経営者が変わった今、事情も変わったということだろう。良いことだと美緒も思う。

「そこで、この模擬挙式で、あなたに花嫁役をやってもらいたい。どうかかな？」

「えっ……、模擬挙式ってスタッフがやるんですか？」

「そうよ。花嫁も花婿も、模擬挙式に出るのは全部、うちのスタッフでやりたいの。いいアイディアでしょ？」

「いいアイディアって……」

普通はプロのモデルを起用するか、ゲストに体験させるのではないだろうか？

そこで黙って聞いていた秀人が口をはさむ。

「要はファッションショーみたいなもんだ。若いカップルを招いて、綺麗なウェディングドレスを披露する。同時に海の見えるチャペルの内部と、華やかな演出を目の前で見ってもらう。ドレスが気に入ればあとで試着したり、記念撮影をしたりできる。君なら、びつたりじゃないのか？」

頹杖をつきながら秀人が言った。やけに楽しそうだ。

「そういうこと。せっかくファッションモデルの経験があるんだもの。私も、中島さんならびったりだと思うの」

どうやら美緒を説得させるために、秀人を連れて来たようだ。同行してきた広報の上司も、機嫌良さそうに頷いている。男たちの援護を受け、さゆりは俄然勢いづいた。

「他にもね、雑賀GMに花嫁の父をやってもらって、ベルの安住君は新郎の介添え役。新郎にはスカイラウンジの木村君。ホテルマン自らが演じる、ウエディング・セレモニーにするつもりよ」

すべてCMに出ていたメンバーだ。木村というのはスカイラウンジにいる長身のバーテンダーで、女性客はもちろん、マリンホテルの女性スタッフにも一番人気のある独身男だった。

だが、木村が新郎役と聞いて、秀人の眉間にしわが寄る。

「ブライダルのほうでは、かなりゴージャスなウエディングドレスを用意するそうよ。式の前にホテル内で写真撮影をして、それをパンフレットに使いたいし、ブライダルの専用サイトでも公開したいの。ねえ、やってみない？」

人の好きそうな顔をして、さゆりは案外、押しが強い。美緒はたじたとになった。

「それは光栄なんですけど、クラブフロアのソフトもあるし、上司と相談しないと」

「その点は、広報課とブライダル課とでフォローするから安心していいよ」

今まで無言で頷いていたさゆりの上司が、そこでようやく口を開く。さゆりが独走しているわけでもなく、広報やブライダルでもこの人選で話が進められているものと思われる。

「ありがとうございます。でも、その……、わたしよりもっと若い子を起用するほうが良くないですか？」

「何言ってるのよ」

こんどはさゆりが、一笑に付した。

「これはティーン向けの企画じゃないんだから。女性の初婚年齢がどんどん高くなっている今、あなたくらいの年齢のモデルがちょうどいいのよ」

さゆりは秀人の肩を叩いた。

「ねえ、神崎君からも頼んでよ。仲がいいんでしょ？ そのために一緒に来てもらったんだから」声が大きかったからか、周りから笑いがもれた。けれどその視線が自分に向けられていると気づいて、微妙な気分になる。ボスと付き合っている女か……と、そんな目で見られるのは嫌だった。

「返事は今すぐじゃなくてもいいの。二、三日考えてくれてもいいから。ねっ」

そうは言っても、さゆりと彼女の上司とニヤニヤ笑う秀人と。三人を前にして、断りにくい空気が流れていた。

新たに開業するにあたり、屋外プールのそばにチャペルと、邸宅風の披露宴会場も新設した。近頃この界隈でも人気の、ハウス・ウエディングを執り行えるようにするためだ。プールの周辺にはテラスや、緑あふれる庭園も用意されている。社としていかに、ブライダル事業に力を入れたいか、美緒にも十分わかっていた。

「わかりました。わたしでいいなら……」

熱意に負けてOKした。答えを引き延ばすこともないだろう。これも仕事。ひいてはホテルのためなのだ。さゆりの顔がぱっと明るくなる。

「ほんとに？　ありがとう！」

彼女は身を乗り出すと、両手で美緒の手を掴み上下に振る。そんなふうには喜ばれると、悪い気はしない。

「早速ブライダル課に報告してくるわ。あと、お宅の上司にもね。ここまでばっちりPRをしてきたおかげで、マリンホテルは最高のスタートダッシュを切ったわ。これからお互い頑張らましようね」

上司を促すと、さゆりは風のように去って行った。その場に美緒と秀人を残して。

「せっかちな。このあと、安住を突撃するんだろう。でも引き受けてくれて助かるよ」

美緒の目を見ながら言っ、彼は食べかけのランチのトレーを元に戻してくれた。

「料理が冷めたな。お詫びのしるしに、作りたてのメニューにお取り換え致しましょうか？」

「ありがとうございます。けれど食事はもう、済んでいますから」

他人行儀な言葉に、秀人はふふんと笑うだけだった。けれど立ち上がり際に小さな声で、休憩の邪魔をして悪かったとささやき、美緒の肩にそっと触れて去って行った。

後姿を見送る美緒は、あらぬ妄想を浮かべそうになるのを抑えて、食器の片付けにとりかかった。

4

その晩、マンションでエクササイズをしていると、前触れもなしに秀人がやって来た。

「車に秘書を待たせてる。すぐ帰るから。なあ、美緒」

彼は玄関に入るなりそう言い、靴を脱ごうとはしない。

「模擬挙式の件、そんなに深く考えるな。単なるイベントだよ。君がOKしたから、安住や木村も引き受けたそうさ。もちろん雑賀GMもな」

「そう」
「忙しいのによその手伝いまでするとは、さすがは中島だと、ブライダルや広報では言われてるぞうだよ」
「皮肉も冷やかしてもない彼の言葉を聞いていると、引き受けて良かったのだと実感できた。」

「それを言うためにわざわざ寄ってくれたの？」

「そう。誰かさんはあれこれ気を回すのが好きだから」

「ありがとう。わたしは大丈夫よ。これも仕事だから。ねえ、ほんの少しも時間は無いの？」

美緒はわざと誘うように、パジャマ代わりに着たシルクのシャツの襟元を指でなぞった。忙しい彼だとわかっていても、顔を見てしまえば離れたくなくなる。ここは自分のマンションで、他人の

目はないのだし。

「残念だが、帰るよ」

願いもむなしく、そんな答えが返ってくる。代わりに、おいでという風に彼は手を差し出した。その手をとり、彼の腕に抱かれる。彼の体温に包まれて、言い知れない至福に包まれる。すぐに顔を上げさせられ、唇が重なった。秘書を待たせているはずなのに、彼のキスはまるで美緒を煽るように、深く繰り返される。

ああ、だめ。キスだけじゃ終わりにできなくなる。もっともっと欲しくなる。

そんな思いにとらわれ始めた時、リビングの電話が鳴った。ずっと携帯電話しか持っていないなかった美緒が、最近部屋に置いた固定電話。この番号を教えているのは秀人の他には母の幸枝と千秋、あとはホテルの人間だけだ。急な用事かもしれない。ちよっと待ってと秀人に断り、急いでリビングに戻る。電話機に表示されたのは、東京の市外局番だ。

「もしもし、美緒さん？」

受話器を取ると、自分より先に相手が言葉を発した。聞き覚えのない、若い女の声だった。

「はい、美緒ですが。どちらさまですか？」

「多香子です……。陰山多香子です、お久しぶりです」

名を告げられてもなお、すぐには相手を思い出せなかった。だが、数秒の沈黙の後ようやく、去年の彰文の結婚披露パーティーで、純白のドレスを着て彰文に寄り添っていた多香子の顔を思い出した。

「ああ……、こちらこそご無沙汰しています。珍しいですね、お電話をいただくなんて」

「彼がそちらに行つてませんか？」

美緒の返事が聞こえていないのか、多香子はいきなりそう切り出した。冷たいような怒ったような、きつい声だった。

「彼？」

「ええ、彰文です。昨夜から連絡が取れないんです」

ふと美緒は、去年千秋がマリソホテルに来た時に言っていた言葉を思い出した。それは彰文が不倫をしていて家に寄り付かず、シヨックで多香子は家に引きこもっている……、そんな衝撃的な内容だった。

「いいえ。来ていませんけど」

「本当に？ 本当に彼はいないの？」

横柄とも感じられる問いかけに、さすがにカチンと来た。

「本当です。失礼ですけど、この電話番号を誰から？」

「お義母様よ……。だって彼が、あなたが出てるCMを見てたから。たまに家に帰っても笑いもしないあの人が、テレビの中のアナタを懐かしそうな顔で見てた。まるであなたに会いたがってるみたいだった……。だからお義母様に尋ねたら、この番号を教えてください」

ふいに多香子は涙声になった。美緒の中に湧き上がってきた怒りが急速にしぼんでいく。

「落ち着いて多香子さん。わたしはもうシンフォニアの人間じゃないから、陰山のおじ様やおば様

にだって会ってないんです。他にいくらでも……」

「ごめんなさい、どうかしてたわ。ええ、他の人を当てるわ……」

「多香子さん！」

涙ぐむ多香子の声が、遠のいていった。しかし、そこで受話器が奪い取られる。険しい顔で後ろに立った秀人が、受話器を耳に当てていた。だが、すでに電話は切れたのか、彼は無言のまま受話器を美緒に返してきた。

「何の話だ」

「彰文さんの居場所がわからなくなって、心配した多香子さんが電話してきたの」

「だからってなぜ君に？　まさか、今でもあの男と会ってるのか？」

「去年のプレゼン以来、一度も会ってないし、見かけてもいないわ」

高圧的な秀人の言葉に思わずかっとなる。多香子だけでなく秀人までもが、自分と彰文を結びつけて考えるとは。彼への愛おしさは消えて、不快な気分でいっぱいになる。

「悪かった。君に当たるなんて、どうかしてるな。ただ、後ろで聞いていてあまりにも腹が立ったんで……」

秀人はすぐに態度を改め、素直に詫びた。そしてもう一度美緒を引き寄せ、腕の中に抱いてくれた。「あの二人、うまくいってないのか？」

「去年千秋に聞いたんだけど、結婚した直後から彰文さんは外泊が多くて、多香子さんを困らせていたそうよ」

あの時はにわかには信じられなかったが、今の電話でそれが事実だったと確信できた。

秀人は驚かなかった。彰文がそういう人間であることを知っているから。

「だからって、周りを巻き込まなくてもな」

慰めるような声で言うのと、秀人は美緒の背をゆっくりと撫でてくれた。心がじんわりとほぐれていく。美緒は時が経つのも忘れて、彼にぎゅっとしがみついた。

突然の多香子からの電話よりも、律子が自分の電話番号を知っているということのほうが、不気味だった。

最後に律子に会ったのは今年の正月。陰山ホテルグループを去ることを決めたので、年始の挨拶がてら、母と陰山家を訪れた。あの日律子は俊文の横で笑みさえ浮かべ、新天地で頑張るようにと言ってくれた。

以来一度も会っていない。もちろん、電話もかけていない。それなのに律子は自分の新しい連絡先を知っている。おそらくは千秋に聞いたのだろう。けれど陰山ホテルグループから離れた自分を、今でもこっそりと見張っているのだろうか。

考えすぎなのは重々承知の上だが、そんな気がしてならない。

「あんまりよくよ考えるな。お肌によくないぞ」

明るい声で耳元にささやく秀人に、気分が上昇していく。

「そうね。ごめんなさい、引きとめちゃって。下まで送るから……」

「俺は構わないが、秘書に見られるぞ。それに暗いから、ここでいいよ」

上着を肩に放ると、彼はキスをせがむようにかがんで唇を突き出してきた。少しだけ背伸びして、ちゅっと短いキスをする。

「おやすみ。戸締りをしつかりな」

少し待たせてしまったが、秘書も運転手も嫌な顔はしなかった。リゾートの副社長に昇進後、三十代の女性秘書と四十代の男性秘書が秀人を支えてくれている。毎日葉浦に同行するのは男の秘書のほうで、運転手はずっと神崎スポーツの重役の送迎をしていた、五十過ぎの男性だ。

幸い二人とも仕事は正確で、なおかつ自分の身分をわきまえた、信頼できる人物だ。上司のプライベートを詮索することもない。

バックシートに秘書と並んで座った秀人は、夜の高速度道路を東京へと向かっていた。胸の中に重たい物がこみあげてくる。

自分を襲った男について、美緒は同業者がホテルへの嫌がらせのためにけしかけたと思いつているが、そうではないことを秀人は知っている。男の名は長井三樹也。陰山彰文の、学生時代からの遊び仲間だ。秀人も昔、彰文と一緒にいる長井と、何度か顔を合わせていた。

事件の翌日、オフィスに押し掛けた秀人に、長井は律子に脅され美緒を襲ったことを白状した。律子は彰文がいつまでも美緒に未練を残していることに、腹を立てていたという。つまり狙われたのはホテルではなく、美緒自身なのだ。

けれどいまだに秀人は、その事実を美緒に伝えていない。子どもの頃から家族ぐるみで親交のあ

った陰山家の夫人が、そんな恐ろしいことを企んだとはどうしても言えなかった。その代わりに秀人は長井に警告した。

「二度と彼女に手を出すな。さもなければ神崎を敵に回すと奴の母親にも伝える」

長井は自分の過ちを認め、一からやり直すために日本を離れた。秀人の警告は律子に届いていると信じていた。それなのに。

あれからひと月ほど経ち、美緒は心の平穏を取り戻したように見える。それなのに、またもこんなことが起ころうとは。それも今度は奴の妻だ。いったい、あの家族はどうなっているのだ。

秀人は膝の上で拳を握りしめた。

陰山彰文め。これ以上、俺を怒らせるなよ。

あの男に関わったせいで、多くの人が人生を狂わされかけている。もしまた、同じようなことが起これば、今度こそただではおかないと、秀人は冷静さを失わぬまま心に誓った。

秋は足早に過ぎようとしていた。新しい仕事にもようやく慣れて来た。

マリンホテルは、順調な稼働率をキープし続けている。何が特別に功を奏したのか美緒にはうまく説明できなかつたが、あえて言うならスタッフ全員のやる気と努力の賜物だろうか。

陰山系列のホテルとして営業していた頃は、何が何でも黒字に転じようという意気込みは感じなかつた。ただ経費と人員をひたすら削減して赤字を最小限にとどめ、かろうじて首の皮一枚でグループ傘下にぶら下がっていたようなものだった。

以前秀人が言ったように、好条件でホテルを売却することしか上層部は考えていなかったのだから外部への宣伝にはほとんど経費をかけなかった。

それが今は、やり手の広報や営業担当者を中心に多方面へのPRが続けられ、バンケットの受注は増え、工夫を凝らした宿泊プランが好評で、客室の売上も大幅にアップした。集客は大成功と言っているだろう。

オーブン前からオンエアしたテレビCMの影響も大きく、CMに出ているスタッフに会いたいというゲストも多かった。特に人気を集めたのが安住で、ホテルのエントランスやロビー内でゲストの希望に応じて、記念撮影に応じたりもしていた。

美緒には地元のタウン情報誌から、取材の申し込みがあった。

「人気モデルからホテルウーマンへの転身」と題した小さな記事だったが、クラブフロアの仕事について簡単に触れ、最後は「ホテルの仕事はハードだがやりがいを感じている」という美緒の言葉で締めくくられていた。

相変わらず仕事はハードだが、クラブフロアの業務は二交代で、フロントのような夜勤は無い。以前と違って人手も多い。週に一度はホテルに泊まり、早出と残業の繰り返しだった頃よりは、うんと楽になった。

それでもオーブンから一ヶ月も過ぎると、さすがに疲れが溜まってきたのか、身体がだるく感じられる。そんな美緒を支えたのは秀人の存在だった。

相変わらず彼は毎日、マリンホテルで執務についていた。手のあいた時間には館内を視察して回

るし、時にはロビーのラウンジで商談をすることもあった。時折美緒は仕事中の彼を見つけ、こっそりとその様子を眺めた。

自分には滅多にみせてくれない、仕事に取り組む彼の表情を盗み見るのが好きだった。そしてそれを、疲れた自分への励ましとしていた。

5

十月も終わりに差し掛かったある土曜日、仕事を終えた美緒は、夜の十時半過ぎにマンションに帰りついた。クラブフロアのコンシェルジュ業務は早朝から夜十時まで。遅番を終えて帰ると、ちょうどこれくらいの時間になる。

帰ってみると留守中に来た秀人が、夕食の用意をして待っていてくれた。玄関のドアを開ける前から外のポーチに美味しそうなシチューの匂いが漂っていて、空腹の胃袋が瞬時に反応する。

「ただいま」

「お帰り」

秀人はシャツの袖をまくりあげ、エプロンをかけた姿で迎えてくれた。

「遅番だと聞いてたから、夕方来た。サラダとシチューとパンを用意してある。デザートはうちのお袋が焼いたアップルパイを分けてもらった。バナナアイスを乗せて食べると美味しいぞ」

荷物を置きにリビングに向かうと、秀人が説明しながらついてきた。濃い緑のクロスをかけたダイニングテーブルには、二人分のカトラリーとグラス、そして数本の赤いバラが、細長いグラスに無造作むぞうさくに活けられている。

ここに料理が並んだ様を思い浮かべると、お腹が鳴った。そして得意げな秀人に導かれるまま、今度はキッチンへと向かう。

「いい匂い……。これあなたが作ったの？」

手もろくに洗わず美緒は、勝手に鍋のふたをあけていた。大きく切った野菜がゴロゴロ浮かんだクリームシチューは、見るからに食欲をそそる。

「勿論だ。けど、食事は軽くすませたいというなら、サラダとデザートだけにするといいよ。風呂もわいてるぞ。どっちを先にする？」

「あなた結婚したら、きつとママなだんな様になるわ。じゃあ、先にお風呂をいただくかな……」背伸びして秀人の唇にキスをすると、美緒は着替えるため寝室に向かった。

そう思うなら試してみるよと言いかけて、近頃美緒がやや神経質になつていふことを秀人は思い出した。いや、前々から仕事中には必要以上に話しかけるなど、注文をつけられていたが。

恐らくは同僚の目を気にしているのだろう。秀人にすれば、中島美緒は自分の女だと宣言したくてもうずうずしていた。隠れたオフィスラブは自分の主義ではない。たとえ自分が副社長だろうと、お互い独身同士、とやかに言われる筋合いはない。これが彼の持論だ。

それに例のブライダルフェアも気に入らない。

企画自体はいいのだが、美緒の相手となる新郎役に自分以外の男が抜擢はくたくされたというのがしやくに触る。たかが模擬挙式。ファッションショーやらフラワーシャワーが中心だとわかっているが、木村というバーテンダーと美緒が、腕を組んで歩く姿を想像しただけで面白くない。

そんなものを企画した楠田さゆりの顔を見るたび、眉間にしわが寄るようだ。

とはいえ自分が新郎役に立候補するのも、どこか子どもじみている。この件を思い出すたび秀人は、ひとりで悶々もんもんとしていたのだ。

三十分ほどで、美緒は風呂から出てきた。

冷えたミネラルウォーターをグラスに注ぎ手渡してから、向こうで待っていると一言つてやる。疲れた顔を隠そうともせず、美緒は言われるままにリビングのソファに腰を下ろした。そのまま膝ひざを抱えるようにしてソファの上で丸くなったのが、キッチンから見えた。

「食欲が無いのか？」

サラダボウルを運んでから、秀人は美緒の足元にしゃがみこんで尋ねた。髪をクリップで留めてアップにし、ローブを羽織っただけの姿は、湯上りにしては気だるそうに見える。

「うん……。何だか疲れちゃって……」

「マッサージしてやろうか？ 言つとくが料理の腕と同じくらい、俺のマッサージの腕は評判がいいんだぞ」

「ほんと……？ ところで誰に評判がいいの？」

「主に高校と大学のテニス部の先輩達に。体育会系っていうのは、先輩が先輩のマッサージをした

立ち読みサンプル
はここまで

りするもんだ。なまじ腕がいいと重宝がられて大変だった」

「嘘みたい……。でも折角だからお願いしちゃうかな」

顔を輝かせた美緒にほっとしながら、秀人は寝室に行くように彼女を促した。

ベッドにうつ伏せに寝かせ、首筋をゆつくりと揉みほぐしてやる。その絶妙な力加減に、すかさず呻き声^{うめ}が上がる。

「いやーん、本当に気持ちいい。こんな特技を持つてるなんて、どうしてもっと早く教えてくれなかつたの」

「それは、気づかなくて申し訳ない。その分これから、たっぷりサービスするよ」

秀人は薄いローブの上から、美緒の細い首筋を丁寧に揉みあげると、続いて肩、それから背中へと手を這わす。彼女の愛用のソープやボディローションの香りが肌から立ち上り、ついそわそわさせられる。

うつかり関係ない場所に手を伸ばしそうになるのを我慢しながら、秀人はたっぷり時間をかけ、全身を満遍なくマッサージしてやった。

初めのうちこそ大袈裟に反応していた美緒だが、途中から気持ちいいのか口数も減り、今では無言でされるままになっている。

最後に太股の付け根に手を伸ばすと、美緒が下着を身に付けていないことに気づいた。

半分寝てしまったのか、うつ伏せのまま目を閉じている。

それをいいことに秀人はゆつくりとローブをめくり上げ、まろやかなヒップをあらわにした。

双丘^{そうきゅう}に手を這わせ、シミ一つない白い肌に唇を押し当てた。

かすかに美緒の身体が反応する。でも嫌がる素振りは見せない。

さらに唇を滑らせて、谷間に口づける。両手で脚を少し押し広げ、舌で奥を探り当てる。美緒が呻き、身体を大きく震わせた。

「止めるか？」

うつすらと目を開けた美緒に尋ねる。眠そうに充血した彼女の目が色っぽく輝いた。

「どっちでも」

「なーにがどっちでもだ。よしわかった。これもリラクゼーションの一つだ。何も考えずに俺に任せとけ」

秀人は笑うと、ゆつくりと円を描くようにヒップを撫で上げた。

こんな時、素直に自分を受け入れてくれる彼女が、秀人は好きだった。男によってはねだったり、積極的な素振りを見せる女を嫌う者もいるが、秀人はそうは思わない。

セックスは大切なコミュニケーションの一つ。性格の一致と同じくらい、身体の相性も大切だと思っっている。幸いなことに自分達二人は気が合うのと同じくらい、セックスの相性も良いと言っいいだろう。

ヒップを少し持ち上げ、閉ざされた秘所に舌を這わせる。ゆつくりと舐めあげていくうち、滑らかにほぐれてくるのが感じられた。そっと指でなぞると、初め固く閉ざされていたその場所はすぐに熱いものがあふれ出し、難なく指をのみ込んだ。